

佛 教 研 究

第七卷 第參號

傳教大師の願文に就て

稻 葉 圓 成

最澄の願文は仁忠の「叡山大師傳」に全文を引用されてあるが、其の著作年時に就いては何等言及して居ない。しかし願文の内容から見ても、亦傳の引用振から見ても、最澄が二十歳の延暦四年七月に始めて叡山へ立て籠つてから間もない時代に書かれたものに相違ない。言ふ所の願文の内容は純真な若々しい求道者の衷心の懺悔と發願とを叙べたもので、どうしても求道の旅にまつしぐらに旅立たうとする者の心の記録であり、そこには悲痛な自己反省が顯はされてあるが、まだ道に躓いて更に起き上らうとする現實につきこんだものではなく、どこまでも、自己の志す理想に、輝いた希望の光を浴せかけた、青年らしい平明な告白である。かうした内容から此願文が籠山の初發心を叙べたものなる事を直觀せしむる。而してこの斷定は仁忠傳の記述に依つて裏書せられる。傳には、

叡山に登り草菴を卜めてひたすら誦經練心の道に進めることを叙した下に、坐禪之隙自製願文といつてある。これに依つて此願文を登山間もなき時代の述作とすることに古來何等の異議を挿んだものはない。

次に最澄の天台修學の時期に就いては、仁忠の傳により古來の諸傳は凡て、籠山後、起信論疏、華嚴五教章等を披閱されたるに、その中に天台義が出て居るのに興味を持ち、それが動機となりて天台の三大部四教義維摩疏等を手に入れて漸く其の修學に志したやうに傳へて居る。尤も仁忠傳では最澄が起信論疏等に天台を指南としてあるのを披閱する度に、涙を流して天台の教迹の披閱の出來ぬのを慨いたと言つてあるから、天台に何等の豫備知識も憧憬もなかつた者が、引用の上だけで下涙慨然する程の憧憬をするのは不自然な事であるから、仁忠の意底にはそれ以前に天台研究を肯定して居つたとも考へられぬことはない。少くとも仁忠傳の上では、非際の傳に見るやうに、天台修學期を籠山以後と決定的に肯定はして居ない。それはいづれにしても、古來最澄の天台修學期は非際傳の如く籠山以後の事として毫も疑を挾まなかつた。それは丁度願文の述作を籠山最初とすると同じやうに。しかし願文を仔細に研究すると、此の天台修學期を籠山以後とする説は修正されねばならぬ。若しそれが修正さるゝならば、最澄の叡山入りの動機に就ては從來の説に幾分の修正が必要となるわけである。そはとも角、先づ願文を検討すると二三の天台獨特の用語を容易に發見し

得る。

まづ第一に六根相似位の用語である。六根相似位は圓教十信位に名くすること、法華玄義五ノ上^{十五}には名ニ圓教鐵輪十信位ニ即是六根清淨似解といひ。同^{十九}右には相似十信とある。五品弟子位を六即中の觀行即に配して五品觀行位といふに對して、六根清淨の十信位を六根相似位とすること天台常途の説であつて、天台獨特の用語である。

次にこの六根相似位の用語は願文には三度用ひてあるが、その初めは我自^レ未^レ得^ニ六根相似位^一以還^ニ出假^一といふ五願中の第一願の文である。これは摩訶止觀正修章の十乘觀法中第九能安忍の意によつたものである。一體能安忍は五品觀行位の行者の用意で、五品位の行者が少しく觀行が出来やうになると、得て人師として持て囃されるもので、そこに行者の危機が潜んで居るから、この位の行者は名利の二つに囚はれぬやうに能く安忍せねばならぬといふのである。出假は觀行の入空に對して、化他を出假といふので、人師として化他に出づることを愼まうといふのが願文の意である。然れば此第一願の趣旨は天台觀の能安忍の意に外ならぬ。能安忍のこと摩訶止觀七三四^{二十}八^左以下に出づ。出假の語を見ずと雖ども、自行の觀行を勸めて化他の爲に誤らるゝことなきを誠しむること誠に切なるものがある。殊に鄴洛の禪師等が名利に人師を好めるが爲に一生何の利する所なく臨終に皆後悔した事例を引き、且つ南嶽禪師の「衆を領すること太だ早ければ求むる所克せず」との警策

語を掲げ、「且く當に安忍して深く三昧を修すべし、行成り力著はれて化をなすとも晩からじ」とある。これを章安の「天台別傳」に、智者大師の臨終、弟子に悟す求懷の中に、吾不_レ領_レ衆必淨_三六根_一爲_レ他損_レ已只是五品位耳とあるに徴するに、「止觀」の能安忍はそのまゝ天台自身の苦き經驗を語るもので、其言ふ所言々みな人の胸臆に迫るものがある。最澄の願文の第一願。この能安忍の意によるもの蓋し所以あることであらう。

次に六根相似位の語を第二に用ゐて居るは若依_三願力_一至_三六根相似位_一云々とある文で、最澄が今世に於いて六根相似位を得るを理想としたものである。これ前引の別傳に見て居るやうに六根位は會て天台祖たる智者大師の志した所なのである。智者大師が六根清淨位を理想として、なせ直ちに妙覺究竟位を志さなかつたかは問題となるべきであるが、そこに智者大師が自己反省を忘れて單なる思想の中に陶醉するには餘りに求道心が目醒めて居たと見るべきであらう。併しそれは今の所論でないから深く論及することを差控ゐるが、この疑問となる事を踏襲した所に、この願文が天台疏に深く心酔して居る人によつて、書かれものだといふことが明かになる。第三に第四願文に除_〇相似位_〇とある。これは般若心を得るまでは世間人事の緣務に著せまいといふ下にある但書の語である。相似位に上つたならば世間人事の緣務に携はるといふのである。これが亦前の能安忍の下に既に暗示された事であるが、止觀の十乘觀法中の第十無法愛の意である。無法愛は六根位の行者の用意で、

既に六根位の行者は相似ではあるか法性のまゝを證悟するが、この證悟の境に陶醉するのを法愛といふ。得てこの位の行者は陶醉境に入り易いから、それを離れて世俗の假に出で、化他の妙用を勤めねばならぬといふのである。除相似位の語はこの用意を言ふものである。即ち籠山三昧はやがて大に伸びんが爲めの少時の坐屈であつて、世俗人事緣務即ち國家社會の仕事を目指すものに、眞に國家社會を熱愛すればこそ遁世するの意を述懐したものである。然れば最澄の意中には籠山の當初より既に日本救濟の理想が燃えて居たことを此に見るべきである。

尙ほ第二願の文に不才藝といひ、今の第四願の不著世間人事緣務といふは、摩訶止觀四ノ三九右二十五方便の息諸緣務の語が用語の典據となつてゐるのみならず、思想的にも典據なること解説するまでもない自明の事である。

此の他、無作無緣四弘誓願の用語も亦摩訶止觀一之五十二常境無相常智無緣以無緣智緣無相境無相之境相無緣之智智境冥一而言境智故名無作に其典據を求むべきである。これは生滅無生無量無作の四種の菩提心を説く中の第四の菩提心即四弘誓願の意を叙べる文である。言ふまでもなくこの無作の誓願は圓教の意を明すもので、天台の意此れに窮まるもので、最澄がこれを探りて自己の誓願としたものである。

又、願文に釋尊遮闍提得人身徒不作善業聖教噴空手とある。聖教噴空手の典據は恐ら

く摩訶止觀四之四八右 睡眠を誡むる文中に當下勤精進策三勵身心二加レ意防擬思三惟法相二分三別選三擇善惡之法一勿下令二睡蓋一得レ入……徒生徒死無二一可レ獲下如下入二寶山一空レ手而歸上深可二傷歎一であらう。空手は入寶山空手の略である。

又、願文に以二無所得一而爲二方便一爲二無上第一義一發二金剛不壞不退心願一とあるは、無所得の空を方便とし、それに對して無上第一義を説くのは、天台の空假中三諦の思想である。無上第一義は中道で、發願は假諦である。殊に無所得の語は三論家の常套語なること常の如くであるが、それを方便と批判したる所に既に天台家の説に心酔せる態度を明に表示するものであらう。

以上願文の上に顯はれた用語に就いて、天台家より借り來るものと思はるゝものを指摘したのであるが、これだけでこの願文が少くとも天台の三大部を研究し且つ私淑した者でなくては書けないものであると斷定するに充分であると思ふ。果して然らば、最澄の天台修學年時を籠山以前に引き上げるか、但し又願文製作年時を籠山以後ズット後まで引き下げるか。孰れかに修正を加へねばならぬ事になる。しかし願文の製作年時は最初に述べた理由で籠山直後のものと考えるのが合理的である。依つて天台の修學年時を籠山以前に引き上ぐべきである。

奈良朝末期に於ける天台敎研究の狀勢は三浦博士の『傳敎大師傳』中「奈良朝に於ける天台宗の先驅」の一節に詳しく述べられてある通り、鑑眞が天台章疏を將來して以來、天台研究は相當に盛ん

であつた。殊に鑑眞は天台の造詣も深く、加之來朝した法進、思諗等の弟子も天台學に通じたものが多かつた。その中でも法進の如きは、本朝高僧傳に従へば四遍も三大部を講じたが此方の學者は早天に雨を得たやうに喜んだといふて居る。而して鑑眞將來の天台章疏は止觀玄義文句各十卷四教義十二卷次第禪門十二卷行法華懺法一卷小止觀一卷六妙門一卷である。仁忠傳には別に維摩疏（圓珍の行業記は維摩廣疏三十四卷といふ）を加へてある。四教義は維摩經玄義である。これらの書目から見ると、法華、維摩の疏が其の大部分を占めて居るが、これが奈良朝の學僧達の注意を惹くには都合がよかつたのではなからうか。それはとまれ。最澄が登山以前に既に天台を學ぶだけの準備が奈良には整へられてあつたのである。翻つて最澄自らの文獻に就いてこれを見るに、三浦博士の傳にも指示されたやうに最澄親撰の天台法華宗附法緣起三卷は逸書ではあるが、その諸書の引用文によつて最澄が道璿及び鑑眞、法進を天台法華宗の附法の祖師中に數へ、且つその中に聖德太子を傳してその徳を歎じてあつたことが知られる。道璿の天台關係に就いては明かでないが、内證佛法相承血脉譜には吉備眞備の道璿和上纂に依りて禪の相承をのべて、道璿—行表—最澄の系譜を示し、附法緣起（傳通緣起引用）には兩聖用心（兩聖は道璿と鑑眞）弘三天台義—といつて居る。鑑眞の具戒和上の荊州弘景は章安灌頂の資で、天台智顛よりは第四祖に當るが、最澄弘仁七年の詩には（一心戒文）には日本玄孫興福寺沙門最澄とあるに徴して、入唐後も尙ほ鑑眞相承の天台の資として自認し居るの

を見るべし。但し此入唐以前の天台宗相承を最澄自らが認めて居たといふことは、それが直に登山以前の相承である證據にはならないやうであるが、この附法縁起に道璿鑑眞を并べて居る所に、それが籠山以前に天台を附法した自認と見たいのである。なせなれば道璿を祖師とする所には、そこに行表を豫想して居るのであるから、やがて戒師たる行表からの口訣を物語るのである。鑑眞は天台章疏の初傳者であつたのみで、元より面授ではない。この鑑眞が日本渡來の動機は日本佛敎の祖たる太子が南嶽禪師再誕なりといふ傳説に基いて居ること、天台宗は南嶽禪師の資たる天台の宗旨であり、太子が法華經を愛誦されたと同じく、天台は法華經を宗として天台宗を興した。而も鑑眞は天台の末資である。それが奮然として萬難を排し失明尙志を屈せずして東征した。そして日本佛敎の現勢は太子の大乗敎精神は失はれた時期である、その時に慧思禪師の芳躅を尋ねて鑑眞は渡來したのである。かういふ不可思議な宿命にもつれた鑑眞が、最澄のやうな鋭い敏感で、而も奈良朝の敎界に満足し得なかつた、血の多い青年が、奈良の學都に出て、どうしてこの英雄僧鑑眞を見逃すことが出來やう。そしてやがて天台を拾得したものであらう。附法縁起に太子を讚歎してあるのは、かういふ意味に於いて誠に意味深いことであつて、少くとも最澄が天台に結びつけられる、間には太子(即ち南嶽の後身と信せられた)の憧憬があつたことを暗示するものである。現に弘仁七年謁太子廟詩には、南嶽と太子と天台の關係を述べて居る。

以上、奈良の教界の状勢と最澄自身との文献より見て、最澄が籠山以前に天台修學をなし得る條件が備つて居たことを述べた。それは元より積極的に天台修學を立證しないけれど、消極的にその可能を證するには充分である。若し然らば、願文は更にそれを積極的に證する資料として提供されるのである。而して若しこのことが許さるゝならば、叡山入りの動機は、智者大師の芳躅に習つて自行修練を此に徹底せしめ、やがて聖徳太子の理想であつた國家救濟の實を擧げんことを理想しつゝ、二十歳の青年僧は蹴然して南都を去つて北嶺に深く入つて行つたのである。